永王の代官として豊後国府に下向したものであろう。善永王については嘉祥二年八月の条に、「左京人六世善測王・善水王（善永王？）等十五人に清原真人の姓を賜う」とある。

清原真人沢雄は天武天皇の皇子舎人親王の後、正五位下小倉王の子清原真人夏野（従二位右大臣）の三男である。清原沢雄に次いで豊後国司に任ぜられたのは登美真人直敏、彼は豊後権守であった。ところが同年（嘉祥二年）十二月十三日、大宰府から早馬があり、豊後権守登美真人直名に謀叛の状があると奏上された。そこで直名は召還されて近国に謫居させられたが、翌三年三月、疑い晴れて放免された。この登美真人は用明天皇の皇子来目王の後である。登美直名に代って豊後に赴任したのは賀茂朝臣美谷、賀茂はまた加茂と書き、加茂朝臣は三輪氏族、大神朝臣と同祖で大田田根子命の孫大賀茂都美命に出ている。代々加茂宿禰を称したが、天武十三年、忌部のとき朝臣の姓を賜わった。

「続日本後紀」承和九年八月の条に、豊後国府から申達され、大宰府から上申された前豊後介中井王の行状が記されている。それによると、

「前豊後介正六位上中井王は、任期が終っても帰郷せず、日田郡に私宅を造作し、諸郡に私営田を所有して、前官の権威をかさにきて、恣に郡司や百姓を苦しめた。そのため日田郡では吏民が騒動を起したが、その騒ぎがまだ収まらないのに、彼はさらに筑後・肥後等の国を横行して、百姓を威嚇し農耕の邪魔をしたり、その役務を妨害したので、人民の被害がいよいよ大きくなった。また中井王は豊後の各郡に入りこんで、旧来の未進貢稲を徴収すると称して、かねて目をつけていた百姓の財物を横領し、未進を代納すると称して、着服した財物を貸与えて納入させ、後日その二倍の代償を収奪した。このような悪辣な行為を続けたため、延暦十六年の詔に従って京都に召還され、太政官に下され延ばし、その罪が決ったが、去る七月十四日の恩赦（崇徳上皇御不豫による大赦令）によって、身柄を本郷に送致した。」（続日本後紀から）

この中井王の悪行の摘発は、豊後守善永王や権掾坂上当岑によって行なわれたものであろう。なお、権守、権掾などの権は仮りの意で、正員以外の官職をさしている。

（つづく）

大阪支より

緒方惟栄公追慕

大阪市民住（鶴見町改浦出身）
会員　水田　長

拝啓　大変ごぶさた申しております。発刊ごとに史談誌をお送りいただき、心から感謝いたしていますが、お報いすることもできず、ただ〳〵恐縮するばかりでございます。これから（注、受信七月十二日）暑さがきびしくなりますので、健康には充分ご配慮下さいますことを祈っております。

（註）以上を前書とする編集子への私信の形であるが、以下もすべて原文のまま所論的確、あまりの名文章ゆえに、木田氏にお断りして会員諸士の一読に供する。（羽柴）

私は郷土である佐伯地方を、こよなく愛しております。時々に郷里に足を踏み入れると、出郷の当時兎道であった細道が、都会なみの舗装に変り、景観もやや落ちつきがなくなって、人々の感情も、古きよき時代の人間関係が、薄くなったようにみられます。

それでも、私達の心には昔の古里があり、温かい人情

が今もなお残っております。山の懐に抱かれた村々が、開発で景観を失われつつあり、神社・仏閣さえ見るとき、一抹の不安がわいてくる思いがします。

そんな中で、龍護寺に惟栄公の供養堂が完成したそうで、まことに慶ばしいことと存じます。（法位牌のことか）私の最も尊敬する緒方惟栄公、郷土の誇る英雄と信じ、敬愛の念をもっています。是非その内参拝させて頂きます。

私は、緒方惟栄公が如何なる人物であったかを、歴史を通じて、またこれまで史談会の資料や、源平時代の古文によって、推測をめぐらしています。

惟栄公の死没は建久年間で、上野の国沼田の配所から赦されて帰国、立石までたどりつき、病死と伝えられています。私はその死因について、多少の疑念をもっています。

当時は、豊後の政情はすこぶる不安で、建久七年には大友能直が守護職として君臨し、豊後の各地には大友氏に対する反抗の気勢があがっていました。そして各所に戦闘が続けられていた実情で、公の帰国が緒方一族の長であるので、その入国の及ぼす影響を考える時、当然大友氏がこれを阻止するであろうし、従者も少なく、防備もない公の帰国には、当然危険がともなってくるし、長い旅路を終えてたどりついた立石での遭難――ということが考えられます。

鎌倉は、緒方惟栄を奥州の藤原秀衡と同様に重視していた様子が窺えます。それというのはご承知のように、文治年間に義経は、藤原氏と緒方氏のいずれかに援いを求めていたほどで、義経が主従と共に大坂から海路をとり、豊後をさして船出し、尾ヶ崎大物沖で遭難したが、緒方一族の勢力を頼っていたことも、史実に明らかであります。

鎌倉方も警戒され、その上郷里豊後の国情も緒方一族対大友氏の戦の時期と考えられ、これらの状況判断からも、公が、旅の疲れから病死などとは考えられません。

時代は移り、豊後の国は大友の支配下にあったので、その真相を究明する術もありません。公の死去を思うとき、一抹の哀れを禁じ得ない。

改めて後日、供養堂に礼拝を捧げたいと存じます。

同封　僅少であるが、なにかの足しに加えられますようお願いします。

（以上）

おしらせ

お慶び申しましょう

横川末吉先生の叙勲

副会長　羽柴　弘

久しく佐伯中学校から鶴城高校の地理の先生であられた横川先生は、名著「郷土の研究」を成されて、ご郷里高知市に帰られ、高知商業高校にお勤めになりました。

そして高知市内はじめ、県内各地の旧家に所蔵の古文書と取組まれ、「高知市史」の編著をはじめ、地方史（郷土史）研究に大きな足跡を残されました。そして尚倦むところなく先生の業績は、高知人士の敬服するところであります。

これらの事が認められ、去る五月上京、勲五等双光旭日章拝受の光栄に浴されました。お目出とうございます。

佐伯中学鶴城高校の水泳の先生として敬慕する教え子も多い。私共は地理・地方史の先導者として、とくに佐伯史談会の私共の志行者として、ご健在を祈って止みません。